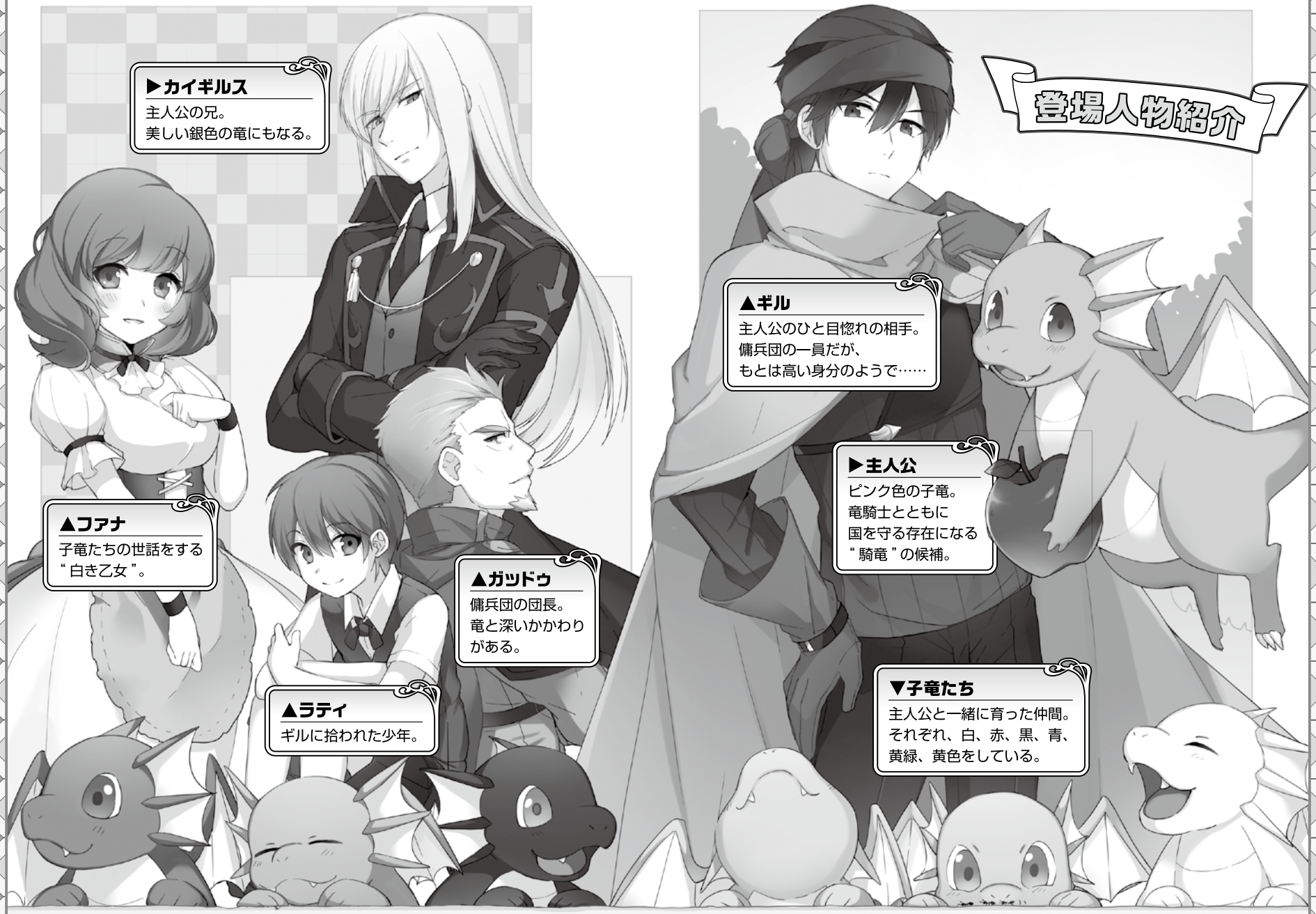
竜転だお！


登場人物紹介
▶カイギルス
主人公の兄。
美しい銀色の竜にもなる。
▲ファナ
子竜たちの世話をする
“白き乙女”。
▲ラティ
ギルに拾われた少年。
▲ガッドゥ
傭兵団の団長。
竜と深いかかわり
がある。
▲ギル
主人公のひと目惚れの相手。
傭兵団の一員だが、
もとは高い身分のようで……
▶主人公
ピンク色の子竜。
竜騎士とともに
国を守る存在になる
“騎竜”の候補。
▼子竜たち
主人公と一緒に育った仲間。
それぞれ、白、赤、黒、青、
黄緑、黄色をしている。

目次

竜転だお！　7

番外編　兄ちゃんと私　271

竜転だお！

プロローグ

こぽりという音とともに、目の前に泡が浮かんでいく。
その泡の行方を追い、視線を上げる。だけど見えるのは、真っ暗な闇だけだ。
逆に下を見ると、黒と白でわけられた市松模様の床がある。その床から、泡が上がっているのだ。
ここは水のなかなのだろうか――
いや、ちがう。だって、私は呼吸をしている。ここには、空気があるはずだ。
じゃあ何故泡が浮かんでくるのだろう？　首を傾げたが、直ぐに「まあいいか」と流した。気にしても仕方ない――そんな気がするからだ。
私は、くるりとその場で回ってみた。視界に、水色のスカートが広がる。裾に白いフリルがふんだんに使われている、可愛らしいスカートだ。
両腕を見ると、スカートと同色の袖もフリルがいっぱいで、手首に向かってぴらぴらと広がっている。
女の子らしい服装に嬉しくなり、私は軽く飛び跳ねる。
だけど、バランスが崩れ、後ろへ体が傾いてしまった。

気づくと何故か、コーヒーカップに座っていた。遊園地とかにある、あの回る乗り物だ。
そして回りだすコーヒーカップ。
私は何もしていないのにそれはやがてスピードを上げ――
揺れる、私の胃。
気持ち悪い。
視界がぐるんぐるんと、回る。周囲の景色が何も見えなくなるほど、コーヒーカップは異常な回転をしている。
気持ち悪い。胃が、気持ち悪い。それに速すぎて怖い。
回すな、揺らすなガクガクさせるな！
気持ち悪い！

第一章　竜転だお！

「ぎゅうぎゅういぃぃ……っ！」

自分の呻き声とともに、目が覚める。

体がゆさゆさと揺れているのは、意識が覚醒して直ぐにわかった。だって、凄い揺れているんだから。

夜中なのか、あたりは薄暗い。それでも、自身に起きている異常ぐらいちゃんとわかるのだ。

「ぎゅっぎゅー！」

気持ち悪い！

そう叫んだつもりの声は、奇妙な音だった。

私の口から出る、声とならない、音。

そして、私の叫びに返ってくる声もまた、奇妙な音。

「きゅうー……」

しょんぼりとした響きからは、相手の『ごめんね』という謝意が感じられる。

そうだった。言葉を紡げなくとも、私たちは互いに言いたいことがわかるのだった。

「きゅっ！」

私は横になっていた体を起こして、夢の世界に居た私を揺さぶり起こすという暴挙に出た相手を睨みつけた。視界はとっても低いけど、相手も同じ身長なので視線はバッチリ合ってる。だから何の問題もない。

コーヒーカップの夢を見たのは、絶対揺さぶられたのが原因だ。本当に怖くて、気持ち悪くなったんだからね！

闇に慣れてきた私の視界に、小柄な姿が映る。

三頭身ほどの、小さく丸い体。薄い鱗が光るツルツルの肌に、瞳孔が縦長になっているくりくりの瞳。頭部の両サイドには、細い骨のようなものが等間隔に生え、その骨の間は薄い膜が張っている。そこが、耳としての機能を持っているのだ。ちっちゃな爪のついた、ちっちゃな手足。まだ細い尾は、くにっくにっと動く。

その姿の名を、私は知っている。

これはまさしく、竜。

その小さな竜が、しょぼしょぼと落ち込んだ様子で私を見ている。

因みに、鱗の色は薄い青色だ。

ついでに言うと、私も目の前の小さな竜とほぼ同じ姿をしている。

――そう！

私は、偉大なる竜……の、赤ちゃんである！

ちやほやされ放題の、赤ちゃんである！

可愛がって〜!!

……とまあ、それは置いておくとして。

『なんで、こんな真夜中に起こしたの！』

そう言って私は相手を詰問する。

おかげで悪夢は見るわ、気分は悪いわ、眠くて目がしぱしぱするわで、最悪だ。

小さな竜――私は、青いのと呼んでいる。だって私たちには、まだ名前がないから――は、申し訳なさそうに一声鳴いた。

「きゅー……」

うむ、簡単に訳すと、夜の闇が怖いから、トイレについて来て欲しいそうだ。

お前は、林間学校に行った小学生かっ！

とツッコむのを、何とか堪えた。

そもそも『林間学校』とか『小学生』なんて言っても、通じないはずだし。

だってその知識は、私にしかないから。

実は、私は前世、人間として地球に生きていたらしい。そのときの記憶を持ったまま、私はこの世界で竜の赤ちゃんとして生まれ変わっているのだ。

前世の私は、地球という星に住む日本人だった。その記憶が私にはあって……不思議だけど、あるものはあるのだから、今世の私は普通にそれを受け入れている。

そんなわけで今、私はファンタジー生物生活を満喫中だ。

そう、ファンタジー！　竜が居るこの世界は、地球からしたら異世界なんだよ〜！

私のなかにある親竜から受け継がれた知識によると、ここはカサトア王国という、竜と人が絆を築いている平和な国だ。そしてこの世界には、ファンタジー世界らしく、魔法がある。

でも残念ながら竜は、魔法を使えないのだ。しょんぼり。水とか風とか、操ってみたかったなぁ……

と、閑話休題。

今、私の目の前で、青いのが闇を怖がっている。その理由に思い当たり、私のなかに小さな罪悪感が芽生える。

いや、その……ね。実は昼間に、青いのを含めた子竜たちに、怪談話を披露しまくっちゃったのだよ。ちょっと暑かったし、涼しくなるかなぁと。日本人だったころの知識をもとにした、がっつり怖い話を、ね。それも、かなり臨場感ある話し方で。我ながら上手な語りだったと自画自賛したんだけど……

皆、見事に怖がってくれちゃって。夕食の時間も涙目でビクビクしてたりして、やりすぎたかなぁ、と反省していたのだ。

私たちが居るのは、子竜専用の飼育部屋で、私と青いのを入れた計七匹の赤ちゃん竜が寝食をともにしている。

他の皆の姿を探したら、こちらも部屋の隅でみっちりと身を寄せ合って寝ている。ああ、皆も怖かったんだね。これは猛省せねば。

『仕方ないなぁ』
うむ、原因は私なのだから、トイレぐらいついて行ってあげよう！
『ありがとう！』
青いのは、嬉しそうに鳴いた。罪悪感再びである。
二匹連れ立って室内に設置されている厠へと向かう。
厠は個室となっているので、青いのは小さなドアを器用に開け、なかに入っていった。
外で待機している私は、時折なかに居る青いのに声をかけてやりつつ、物思いに耽る。
さっきまで見ていた夢のなかで、私は人間だった。懐かしい目線、体の感触。可愛い服を着ていたなあ。
竜の赤ちゃんとして生を受けてから、三ヶ月ほど過ぎている。なのに、私の人間としての意識は薄れる気配がない。
竜に転生というびっくり体験が、まさか自分の身に降りかかるとは思わなかった。
「くるるぅぅ……」
何だかしんみりとしてしまい、鳴いてみる。
赤ちゃん竜が、母親を呼ぶ鳴き方になってしまったのは、きっと恋しくなったからだろう。
それが、人間だったころの思い出に対してなのか、それとも、卵から生まれたばかりのころに引き離された、母親竜へのものなのか。
感傷的になっている私には、よくわからなかった。

しばらくして、青いのが厠から出て来たので、一緒に皆のところに戻る。
そして、みっちりとくっついて眠る子竜たちのなかに、二匹揃ってこれまたみちっと入り込む。
……嫌な夢を見たあとに、皆と離れて眠る勇気が、私にはなかったのである。

翌朝、きゅいきゅい～というにぎやかな子竜たちの鳴き声で、目が覚めた。
きょろきょろと周りを見回すと、窓から差し込む朝日で明るくなった部屋のなか、思い思いに遊ぶ皆が居る。非常に楽しそうで、昨夜のみっちり具合が嘘みたいだ。
良かった、良かった。
実は気にしていたのだよ。私の怪談話のせいで、皆の心に何かしらの影響が出ていたらどうしようと。
しかし皆は、昨日の恐怖などなかったかのように、絶賛お遊び中だ。
それを見て、私の後ろめたさは完全に消えた。
ならば、私も皆の輪に入りたい。
「きゅっきゅー」
私は走り出そうとして、ふと、床の上に何かあることに気づいた。
床に敷かれている、真っ白なシーツ。これは、子竜の寝床代わりにもなっている。
「きゅー！」
なんとなく心惹かれ、あまり深く考えずに、私は白いシーツを頭から被った。

『お化けだぞーう！』
私はゆらゆら体を揺らしながら走った。皆のもとへ。
「ぎゅいいいいい!!」
瞬間、六匹分の悲鳴が響き渡る。
この悲鳴は、人間で表すならば、「きゃあぁぁぁ！」ではなく、「ぎゃいあぁぁおぉぉう!!」という、叫びに近い悲鳴になっている。つまり、子竜たち、恐慌状態である。昨日の怪談話は、子竜たちの心に深いキズを負わせていたようだ。
でも走り出した私は、止まらない。——止まれない、とも言う。なぜなら、遊びたい心が暴走していて、もう私の意思ではどうにもならないからだ！
『うわーん！　怖いよー！』
被ったシーツ越しなので、何も見えないが、絶えず聞こえる悲鳴から察するに、子竜たちは逃げ惑っているに違いない。それでも私、止まれる気配なし。
本当に、なんか、ごめんなさい！
子竜部屋の阿鼻叫喚は、騒ぎを聞きつけた世話役の人たちが来るまで続いたのである。
因みに、子竜たちの悲鳴は、離れた場所にある、成竜——大人の竜のこと——たちの竜舎にまで届いていたようだ。竜は、種族愛が強い生き物である。成竜は、子竜をとても可愛がっている。だからこの悲鳴に、成竜たちは子竜に何かあったのではと、相当動揺したらしい。子竜たちの比ではない騒ぎになったと、世話役の長からこってり絞られた後に聞かされ、私の胃はキュッとなったのだった。
本当、もう、すみませんでした。

◆　◆　◆

同時期に卵から孵った私たちは、今が遊びたいさかりだ。毎日、元気いっぱいに過ごしている。
子竜の朝は早い。一匹が起き出せば、他も倣うかのように次々と起きてくる。
そして、遊ぶ。ひたすら遊ぶ。じゃれつき、転がり回る。
白熱してくると、ごんごんと頭突きをしたり、体当たりが始まることもある。
頭突きあたりで、まず青いのが泣き出す。青いのは、『守護壁』を作るのが下手なので、他の六匹よりも痛い思いをしてしまうのだ。青いの、強くなるのだよ。
『守護壁』という白い光は、竜が使える防御の魔法陣らしい。魔法陣と言っても、魔法ではない。竜にしか使えない特殊能力のようなものだ。
成竜になったときに、たいへん重宝するのだと聞いている。
そして、泣き出した青いのを慰めるのが、白い鱗が輝く子竜——白いのである。
白いのは、七匹のなかで一番の気配り屋さんなのだ。
「うぎゅっ、ぎゅにゅっぐ……っ」

『よしよし』

ぐしゅぐしゅと泣く青いのの頭を、白いのは撫でて慰めている。

その横では、白いのとは対照的な漆黒の鱗を持つ子竜――黒いのが、ちょこりと座っている。

黒いのは寡黙な質で、あまり鳴き声を上げたりしないし、何を考えているのかわかりにくい。とはいえ、普段は部屋にある遊び道具でじゃれているから、遊び心は一応あるはず。

怪談話も怖がってくれたし！

今の黒いのは、多分白いのと一緒になって青いのを慰めているのだと思う。

無口だけど、情がないわけではない。黒いのは、そんな子竜だ。

青いのたちから少し離れた場所では、黄色の鱗と黄緑色の鱗を持つ二匹の子竜が、きゃっきゃっと歓声を上げている。

私が、黄色と黄緑と呼んでいる彼らは、同じ母竜から生まれた。卵は当然別々だが、いわゆる双子と呼べる間柄である。なので、凄く仲が良い。何でもわかり合っているという雰囲気が、ひしひしと伝わってきて、ちょっと羨ましくもある。

そんな仲良しな二匹が歓声を上げている先に、私は居る。

正確には、私ともう一匹。

赤い鱗を持つ子竜――赤いのは、額のあたりにぽわっと光る円形の光を纏い、私に突進してきていた。子竜たちの遊びの一つ、体当たりを私に仕かけているのである。

私にも、闘争本能はあるのだ！

「きゅにゅっぎゅぐうぅぅ！」
気合を入れて、私は後ろ足を踏ん張り、赤いのと同じように白い円形の光を額に纏い、赤い彗星と化した赤いのを待ち構える。この白い光は守護壁だ。
「きゅっきゅーい！」
実に楽しげな鳴き声を上げ、赤いのは守護壁ごと、私の守護壁にぶつかってくる。
その威力ときたら！　踏ん張った後ろ足が悲鳴を上げ、私の姿勢は赤いのの力に押し負けるように、どんどん低くなっていく。
バチバチバチッ！
ぶつかり合う守護壁が、鋭い破裂音を放つ。
因みに、子竜の頭突きや体当たりといった遊びは、守護壁を扱えるようになる為の練習でもあると思う。
「きゅきゅーう！」
「ぎゅぎゅぎゅうぅ！」
二つの鳴き声のどちらがどちらなのかとか、愚問であろう。後半の、スッゴく苦しそうなのが、私である。
バッチィと一際鋭い破裂音が鳴り、私の守護壁が大きく歪んだ。まずい、体勢が崩れる。
『いっくぞー！』
赤いのは自身の守護壁の形状を大きく変えていく。平らな盾の形から、先端が尖った円錐形へと。

擬似的な角を、守護壁で作り上げたのだ。
守護壁の扱いは、七匹のなかで、赤いのが一番上手い。
そして、再度の突進である。
「きゅうううぅ！」
完全に押し負け、はじき飛ばされる私の視界に、私たちの勝負を観戦していた二匹が歓声を上げているのが見えた。くそう、後で覚えてらっしゃい！
そして、赤いの。もう、お前は最強だよ。私たちじゃ、勝てない。
先輩の成竜さんたちに相手してもらってよ。七匹のなかじゃ二番手の私でも、全然敵わないんだから。
赤いの、本当に、強……
「きゅふうううぅ……っ」
舞い上がった私は、青いのたちの方に落下した。
偶然じゃない、計算だ。
いや、疲れたのだよ。癒やされたいのだよ。
白いのー！　慰めてー！
「きゅうきゅう」
すり寄る私を、白いのが抱きしめ返してくれる。白いの、優しい。
そして、赤いのは、未だにハッスルしている。元気だな、忌々しい！

そんな、いつもの朝の時間を過ごしていたら、突然規則的なノック音が響いた。
途端に動きを止める私たち。
視線は、飼育部屋の出入り口である頑丈な扉に集中する。
私も、うずうずしながら扉が開くのを待っていた。すると、ぎいぃという重低音を響かせ、扉が開いた。そして、白いワンピースを着た十七、八歳ぐらいの少女が数人入って来る。
世話役の女の子たちだ！
『わーい！』
『おしょくじだー！』
女の子たちに群がる私たち。
因みに、私たちの身長は女の子たちの膝よりも低い。本当にちびっ子である。
「さあ、子竜さまたち。お食事をお持ちしましたよ」
女の子のひとりがそう言った。
「きゃうきゃうきゃう！」
はしゃぐ私たちに、彼女らはトレイの中身を見せてくれた。世話役の子たちは、子竜の言葉がわかるのだ。
「今日は新鮮な、ミルアとルシュカの実ですよ」
ミルアは、りんごみたいな形をした果実である。ルシュカの実に関しては、個人的いや、個竜的？　――まあ、いいか。とにかく私としては、コメントしたくないのである。理由は伏せるよ。だって、トラウマだもの。
そう、だから……世話役のお姉さん。
なんでよりにもよって、ルシュカの実を、満面の笑みでわたくしに勧めるのでしょうか。
「さあさあ、子竜さま。子竜さまにそっくりの、可愛らしいルシュカの実。どうぞ召し上がれ」
嫌味のない笑顔と台詞が、私を打ちのめす！
私にそっくりな、ルシュカの実！
だからこそ、トラウマなのですよってんだ！
「きゅ、きゅー……」
私は心底弱って、差し出されたルシュカの実と、女の子を交互に見つめる。
彼女は、心配そうに、声をかけてきた。
「子竜さま、もしや、お加減が悪いのでしょうか。ならば、薬湯か専属の医師を派遣して……」
『そ、それは、どっちもイヤー!!』
薬湯は舌が痺れるほど苦いし、お医者さんも結局苦い薬を飲ませるだけだから、無理です！
「きゅー、きゅー」
私はごまかすように、女の子の手にほっぺをすりすりする。甘えてますよ！　薬、嫌だから、幾らでも甘えますよ！
「まあ、子竜さまったら、甘えん坊さんですわね。ふふ、お加減に問題がないのでしたら、ルシュ

カの実を召し上がってくださいな」
「きゅー」
仕方ないのである。苦いお薬を飲むぐらいならば、ルシュカの実を選ぶ。
私は世話役の女の子からそれを受け取ると、かじりついた。
「きゅーきゅ」
むにゅむにゅとした食感とともに、甘い汁が口のなかに広がる。
甘くて美味しいルシュカの実は、味も見た目も、前世の桃にそっくりだ。色も同じ。
つまり、〝ルシュカの実そっくりな子竜さま〟である私は、その、鱗が……
「ふふ、子竜さまは本当に可愛らしいです。ルシュカの実と同じ色のお体も、とても素敵ですわよ」
世話役の女の子の言う通り、私の鱗の色は……ピンクだ。桃色だ。
くうぅ、何故、ピンクなんだ!!　私の鱗！
いくら魔法の存在するファンタジー満載な世界とはいえ、ピンクは、ちょっとないだろ。可愛いにもほどがある。
私、青いのと同じ色が良かったなぁ。
青いのの鱗は、晴れ渡る深い空の色だ。羨ましい。
私なんて、ちょっと丸くなってすよすよ眠ってたら、ルシュカの実みたいって言われるのだ。
子竜とはいえ、女の子である以上、ルシュカの実の丸みを帯びた姿に似ているというのは、傷つくんだよ。
まあ、美味しいけども！
周りを見ると、他の子竜たちはもう食べ終わっており、思い思いに寛いでいる。
ほかの女の子たちは、後片づけを始めていた。
しまった！　恒例のアレをせねば！
「きゅっきゅっ！」
急いでルシュカの実を食べ終え、私は目の前のトレイに残っているミルアを両手で掴んだ。そして、目の前に居る世話役の女の子に差し出す。
『どーぞ、食べてくーださーい』
そう鳴き声を上げる私に、毎回のことなので心得ている彼女は、優しく微笑んだ。
「まあ！　子竜さま、お優しいですわ！　私にくださるのですね？」
『そうですよー！』
「でも、とっても残念です。私、今お腹がいっぱいですの」
本当に残念そうに言う世話役の女の子に、私はそーなのー？　とばかりに、小首を傾げる。女の子も同じように、小首を傾げる。
「ええ、ですから、どうぞ子竜さまが召し上がってくださいな」
「きゅきゅー！」
なら仕方がないよね！　と、私はミルアをしゃくりとかじった。

おーいしーい！
ミルアは、私の大好物である。
目をキラキラと輝かせる私に、世話役の女の子は少し高い声で言う。
「本当に、子竜さまったら、可愛いのですから！」
「きゅふー」
てへーと、私は返す。
今までのやり取りは、毎度のことなのだ。
私なりの、女の子たちとの交流方法というか、甘えているというか。
毎回、世話役の誰かを捕まえて、そのときのご飯をどうぞどうぞと持っていくのだ。
でも、それは本当に食べてもらうわけではなく、私に意識を向けてもらう作戦のようなもので。
もちろん、女の子たちが子竜の食べ物を実際に食べることはないとわかっているからやっているのだ。
食べ物を持って行った相手は、必然的に私に構うことになる。そうすると、私は相手を独占して甘えたい放題なのである。
私の考えは彼女たちもわかっているので、目一杯甘やかしてくれるのだ。幸せー！
「きゅきゅきゅー！」
抱き上げてもらった私は、女の子の胸で、ミルアを堪能したのである。

◆
◆
◆

眩しさで眩む視界のなか、誰かが私を見つめている。人間だというのは、逆光でできたシルエットでわかった。
その誰かは、優しく笑いかけてくれる。
しばらくすると、もうひとり現れた。
その人も、私を見て笑ったようだった。
幸せな、光景だと思った。
とても幸せで——そして儚い、と思った。

鋭い衝撃を顔面に受け、私は夢から覚める。
ズキズキして、頭とかほっぺとか、痛い。
何だ、何が起きたのだ!?
「ぎゅにゅっうぅ……っ」
あまりの痛みに、目からはぼろぼろと涙が零れ、寝床代わりのシーツに染みを作っていく。
思わずうずくまりそうになったとき、不穏な気配を感じて咄嗟に守護壁を展開する。
瞬間、バチィィィ！　という鋭い音を立てて、守護壁が何かを弾き返した。
「きゅっ！」

弾き返したものを見て、私はギョッとなる。
赤いのだ。不穏な気配の正体は、寝ぼけた赤いのが振り下ろした足だったのだ。
赤いのは弾き返された勢いのまま転がっているが、恐ろしいことに、未だに眠ったままだった。
何という寝相の悪さ。
そして、ハッとなる。
もしや、先ほどの顔面に受けた衝撃は、赤いのの蹴りだったのではなかろうか。ならば、この痛みも納得だ。
今も転がり続ける赤いのの脅威に、私はぶるりと体を震わす。
「きゅっ!?」
私が怯えているうちに、赤いのは再び皆が眠る寝床に戻ってきた。まずい、皆が危険だ！
とか慌ててる間に、青いのに蹴りが入ってしまった！
あ、ああ、青いの！　大丈夫か！
「きゅにゅっ、ぎゃにゅうううぅぅん!!」
青いのの泣き声で、他の皆も起き出した。
白いのが、青いのの状態を確かめに走り寄る。
赤いのは依然として、転がり続けたままだ。どうしたんだ、赤いの。今まで、そんなに寝相悪くなかっただろ。
黄色と黄緑が、連携を取り赤いのを止めに入る。よし、あの二匹のコンビネーションは凄い。力では赤いのには劣るけど、二対一なら、充分に勝てる！　頑張れ！
そして私だが……只今、黒いのの胸で泣いている。青いのの泣き声に触発されたのか、顔面の痛みが甦ってきたのだ。
『うわあぁぁん！　痛いよー！』
しばらくして、私たちの泣き声を聞きつけた人たちが来るまで、私と青いのは泣き続けた。
直前まで見ていた夢の内容が痛みで儚く散ってしまったことに、私は気づくことさえなかった。

朝からのとんでもない騒ぎの後、世話役の長が飼育部屋にやって来た。
世話役の長は、灰色の裾の長いワンピースを着た、老齢の女性だ。
彼女は、ゆったりとした動作で頭を下げてからゆっくりと話し出した。
「子竜さまがたに、お知らせがございます」
「きゅう?」
お知らせとな。何だろうか。
まさか、赤いのにお仕置きをするとかじゃないよね？
いや、赤いのならば、白いのを始め皆から叱られてしょんぼりしてるから、もう許してやってください。
これ以上の罰は与えないであげてください！
そんな気持ちを皆と共有しつつ、私たちは世話役の長の言葉を待った。

ごくり。
しかし、お知らせの内容は予想外のものだった。
「皆さまには、この大部屋から個室に移って頂きます」
うん？
大部屋……ああ！　この飼育部屋のことか！　一瞬何のことかわからなかったよ。
そうか、世話役の人たちは大部屋って呼んでるんだ。一つ勉強になったぞ。
いや、そうじゃない。
問題は、そこじゃないのだ。
『どういうこと？』
と、青いのが少し泣きそうになりながら聞いた。
「つまり、これから皆さまは、一緒の部屋ではなく、それぞれの部屋にてお過ごしくださるよう、お知らせに参りました」
「きゅーー!?」
えっ、ということは、もう皆とは一緒に居られないってこと？
え、やだ！　絶対、やだ！
「きゅうっきゅうきゅっ？」
赤いのが、自分が寝ぼけて暴れたせいなのかと、必死に尋ねる。いつもは元気いっぱいのあの赤いのが、青いのみたいに目に涙を浮かべている。

「違いますよ、赤き子竜さま。時期がきたのです。皆さまが、騎竜としての自覚を持たれるべき、時期が」
世話役の長は、赤いのを安心させるように、緩く首を振って言った。
――騎竜。
ああ、そうか。私たちは、ただの赤ちゃん竜ではなかったんだっけ。
いつかパートナーとなる騎士――竜騎士――を見つけ、その人と一緒に生きる。野生の竜とは違い、知性ある竜の子どもである私たちは、竜騎士とともに国の為に尽くすのだ。自身が選んだ騎士とともに戦い、ともに果てる。それが騎士をともなう騎竜としての誇りであり、使命だった。
その名誉ある騎竜の候補が、私たちなのだ。
「これまで一緒にお育ちになられたのです。おつらいでしょうが、他の成竜さま方も乗り越えてこられました。堪えてくださいませ」
うう、皆と離れるのは、つらい。
だけど、世話役の長に頭を下げられてしまえば、これ以上不満を言うことはできなかった。
「きゅっ、きゅふっ」
青いのの泣き声を聞きながら、私は肩を落とした。

世話役の女の子たちに抱えられて、私たちは半年以上をともに過ごした部屋を出た。
意外なことに、最初泣いていた青いのは、それ以上騒がなかった。ただ静かに、俯いている。

一番抵抗したのは、黄色と黄緑だった。二匹揃って小さな手足を必死に動かして、彼らは暴れまわる。

嫌だ、離れたくないと、涙を流して、嗚咽まじりで必死に訴えて——そして、やはり最後は世話役の長の説得により、諦めた。

私も、皆と離れるのは嫌だったけど、そんな二匹の様子を目にしていたから、わき出る感情をぐっと堪える。私まで騒いだら、世話役にもっと迷惑がかかってしまう。だから不覚にも号泣しそうだったけど、私頑張ったよ。

新しい部屋に向かう間、私は抱えてくれている世話役のお姉さんの胸に顔を埋めて、しんみりとしていた。

——新しい部屋に、着くまでは。

「きゅにょ!?」

「きゅっきゅ！」

「きゅきゃっ」

私を含めた七匹の子竜の驚きの声が、重なる。

何てことだ。

私たちの個室、皆おとなり、横並びだよ！

近い！　皆の部屋、近い！

何だよ！　それならそうと、言ってくださいよ！　何か、永遠の別れっぽい雰囲気だったじゃないか。私たちの涙返せ！

「ほほほ、これならば皆さま寂しくはありませんわね」

世話役の長が、しれっと言う。

あ！　さてはこれ、洗礼的な何かだな！　一度、私たちの心を突き落とし、精神的に強くするとか、そんな感じの。

くう、まんまと引っかかって悔しい！

そんな気持ちで、世話役の長を見る。

世話役の長は笑いを引っ込めると、一転、真剣な表情を浮かべる。

「……確かに、皆さまの部屋は近いです。しかし、それは警備の為でもあります。これから皆さまの身に、いかなる危険が起きるかわかりません。ですから、むやみやたらと部屋からお出にならないよう、お願い申し上げます」

つまり、ここの警備は頑丈にしてあるけど、部屋の外をうろちょろしてると凄く危険だよっていうことだよね。

竜である私たちは、貴重な存在だ。そして、いかに強い竜族といえども、子竜時代は隙が多いのだ。そんな子竜を狙う悪いやつが、やっぱりいるのだという。

ひとりは寂しいけど、あんまりうろうろするのはやめておこう。安全第一だ。

「では、皆さま。どうぞ、おくつろぎくださいませ」

そう言うと、世話役の長は私たちの前から去っていった。

私たちも、それぞれの部屋へ入ることにする。
『じゃーね、みんなー』

ドアを開けて、新しいお部屋のなかを見る。
うん、前の部屋と同じぐらいの広さがあるね。
石畳の床と壁も、同じ。天井は、今までより高いかな。
寝床には、ふっかふっかの毛布が敷かれている。
本棚も、玩具もある。実は私たち、文字が読めるのだよ！
習ったりはしてないけど、読めるし、人間の言葉も理解できる。
私たち竜は、親竜から子竜へある程度の知識が受け継がれるのだ。それは、生まれた瞬間から認識できて、様々なことが赤ちゃん竜であっても理解できる。
だけど何故だか、私はこの世界の知識が、ほかの子竜たちに比べるとちょっと曖昧な気がする。
日本のことはしっかり覚えているというのに。
私のお父さん、お母さん、どうした!?　それでも、文字は読めるし、人間の言葉もわかるから、まあいいか。
閑話休題！
いや、まあ、生活環境が充実してるのは、良いのだけど、ね？
「きゅ、きゅー……」

「どうかなさいましたか、子竜さま」
いや、世話役のお姉さん。どうしたじゃないよ。どうしたもこうしたも、大変だよ！
こ、この部屋、鉄格子があるのですが！
なんで部屋に、鉄格子？
ドアを開けたら、鉄格子。私の寝床や玩具は、その鉄格子の向こうにあるのですが。
戸惑う私に、世話役のお姉さんはにっこり微笑んだ。
「鉄格子が気になるのですね」
『とっても、気になります！』
世話役のお姉さんは、私をそっと下ろすと、自身も膝をつき、私と目線を合わせた。
「これは、子竜さまご自身と、子竜さまのお心をお守りする為のものなのです」
「きゅう？」
困惑する私に、世話役のお姉さんは続けた。
曰く、今朝の赤いのが起こした騒ぎは、他の子竜たちにも起こり得ることだったらしい。
あれはただの赤ちゃんから、竜としての本能が目覚める兆しだったというのだ。
赤ちゃん竜はあまりにも弱い存在だから、群れて過ごす習性がある。そのときは、他の子竜と過ごしても何の問題もない。
だけど、赤ちゃんを脱するころになると、竜本来の特性が強くなってくるのだ。
竜って、実はかなり警戒心の強い生き物で、攻撃的なんだって。あ、でも、騎士と契約した竜は

違うよ。騎士と契約すると、本能より理性が勝るようになるのだ。でないと、他の竜と生活できないもんね！

だから今朝の赤いのは、警戒心と攻撃性が増して周りに居る子竜の気配を敵と認識してしまい、無意識のうちに暴れてしまったそうだ。

つまり、赤いのは成竜（せいりゅう）へ一歩踏み出した状態ということ。それは他の子竜も同じらしい。

だから、部屋をわけたのだ。お互いに、傷つけ合わないように。

そしてこの……鉄格子。

一番不安定な子竜から成竜への成長期――私たちが本能に負けて、世話役の女の子たちを襲わないようにする為の対策だそうだ。

「子竜さまが意図せず私たちを傷つけて、お心を病むことを避けたいのです」

「きゅ！」

確かに、世話役の女の子たちのような、優しさ溢れる存在に怪我（けが）を負わせるなんて、絶対に嫌だ。

納得した私は、恐る恐る鉄格子のなかに入る。

「鍵をかけるのは夜の間だけですから、怖がらずとも良いのですよ」

『なーんだ』

新しいお部屋は鉄格子つきですが、なかなかに居心地が良かったです。

◆

◆

◆

「ぎゅにゅりにゅりぃ……っ」

朝から私は、呻（うめ）いております。

夢見が悪かったのです、とっても！

個室での初夢は、もう、本当に最悪だった！　思い出すだけで、ムカムカが止まらない。悲しい思いもしたし！

石畳の床をころころと転がり、それでも腹立ちが収まらないので、今度は寝床用の毛布を噛み噛みする。

かれこれ、一時間は同じことを繰り返しているのである。

ムキャー。

ようやくスッキリしたのは、世話役のお姉さんが朝食を持ってきてくれたからだった。

お姉さんがトレイを置いた瞬間を狙い、腕のなかに飛び込んだのだ。

それから、すりすりと甘え、ようやく私の苛々（いらいら）は消えた。

この世話役のお姉さん、私の専属になったんだよ。名前も教えてもらったよ。ファナさんって、いうんだって。くるくるとした栗色のくせ毛を肩まで伸ばしてて、目元の泣きボクロが大人っぽい十八歳。

「子竜さま、くすぐったいですわ」

「きゅうぅ」

ああ、ファナさんの抱っこ気持ちいいなぁ。癒やされる。
「さあさあ、子竜さま。朝食にいたしましょう」
「きゅ！」
私は元気良く返事をしたけれど、結局、ファナさんに抱っこしてもらったまま、朝食を食べました。
いや、なんか、ひとりってやっぱり寂しくて。人肌が、いつも以上に温かく感じるのだよ。
こういうのも、赤ちゃん返りっていうのかなぁ。
お腹いっぱいになり、私はようやくファナさんの腕から降りる。
今までなら、ご飯の後は皆と玩具で遊んだり、本棚にある絵本を読んだりしていたのだけど、今日から私だけだ。
何をしよう。ひとりしりとり？　それとも、あや取り？　ああ、でも子竜の手じゃできないし。
人間のころが懐かしい！
意味もなく羽をパタパタさせたりして、暇を潰してみる。
そういえば、私たち竜の羽って、背中に生えているんだよね。
成長すると男女で羽の形状が変わるというのは、親竜からの知識にある。
今は、小さいことに加えて、羽が柔らか過ぎて飛べないけれど、成竜になれば大空を悠々と飛べるようになるのだ。
「きゅーきゅー」

パタパタとやり続けていたけど、何やら虚しくなってきた。
青いの、どうしてるかな。泣いてないかな。
他の皆も、寂しがってないかな。
部屋に慣れる為とかで、しばらくは外に出ちゃいけないと言われている。寂しいなぁ。
しょぼしょぼと、再び毛布を噛んでいたら、トレイを片づけに行っていたファナさんが戻ってきた。そして、何やら嬉しそうだ。
「子竜さま！　お喜びくださいませ！　兄君さまがいらっしゃいますよ！」
『兄ちゃんが！』
――子竜には、親竜が存在する。
そして、竜は一生の間に何回か卵を生む。
というわけで、私には、兄ちゃんがいるのだ。
銀色の鱗を持つ凛々しい成竜で、身内の欲目を抜いても、かなりの美形である。
他の六匹の子竜たちにうらやましがられる、私の自慢の兄ちゃんだ。
「……元気そうで、何よりだ」
「相変わらず、ちびっこいなぁ」
前半の台詞が、我が麗しの兄ちゃんで、後半が、えっと……思い出した！　竜騎士のザックさんだ！　兄ちゃんのパートナーであるアーサーさんの、友達。
あれ？　なんでアーサーさんじゃなくて、ザックさんが一緒なんだろ。

いや、今はそれよりも、だ！
きゃー、兄ちゃん、人型になってるー！
竜姿も格好いいけど、人間バージョンも、ちょーステキー！
鱗の色と同じ、銀の髪はサラサラのストレート。それを腰まで流してて、まさにキラキラ！
すっと通った鼻筋に、切れ長の青い瞳に痺れそう！
今日は、黒を基調とした竜騎士の団服をお召しですね。ロングコートがとっても、似合ってます！
あ、私たち知性ある竜は、人間の姿になれるんだよ。成竜になると、だけど。これは野生の竜には真似できない技だ。
『兄ちゃん、格好いいー！』
テンションが上がった私は、兄ちゃんに飛びつくように走り寄る。
すると、兄ちゃんの右足がゆっくりと上がって、私の体をちょいっと引っかけ――
「きゅーーーー」
ぽーんと、綺麗な放物線を描き、高い天井に届きそうなところまで飛んでいく私。
兄ちゃんが私を蹴り上げたのだ。
「な、何をなさいます!!」
「まあまあ、ファナ。大丈夫だから」
ツンツンとはねた茶髪と、いたずらっ子のように輝く焦げ茶色の目でザックさんが言う。

あれ、ザックさんとファナさんって、お知り合いですか？
と考えたあたりで、私は床に落下した。
ぽーんぽんと、二、三回軽く跳ねて止まる。
「こ、子竜さま……？」
うつ伏せになった私に向けられた、ファナさんの不安そうな声。
そして、むくりと起き上がる私。
うむ、まったく痛くない。子竜とはいえ、竜という生き物は頑丈なのだ。
「こ、子竜さま？」
「きゅっ！」
再び私を呼ぶファナさんに、私は右前足をびっと伸ばし、大丈夫と伝える。
気分は、至って爽快だ。
『兄ちゃーん、もういっかーい！』
と、私はまた兄ちゃんに向かって走り出す。
そして、ぽーん再びである。さすが、兄ちゃん。迷いがない蹴り上げである。
「きゅっきゅっ！」
ぽんぽん床に転がりながら喜ぶ私を、ファナさんは呆然と眺めている。
「……あ、あの、ザックさま。いったい、何が」
「あー、と。あれは、あいつらなりの愛情表現なんだ」

「あっ、愛情表現!?」
ファナさん、びっくり！
いえ、普通は、驚きますよね。
でも、本当のことなのです。
この、ぽーんが、私と兄ちゃんの愛情表現なのである。
あれは、そう。私と兄ちゃんが初めて会ったときのこと。
当時の私、生後二ヶ月。今よりも、もっとちっちゃくて、もっとキラキラとした赤ちゃんだった。
好奇心も旺盛で、初対面だというのに、兄ちゃんの足元――このときの兄ちゃんは、竜の姿だった――を、ちょろちょろと動き回って、はしゃいでいたんだよね。
兄ちゃんは兄ちゃんで、今まで年下の子竜に会う機会がなかったらしく、相当緊張していたようだ。
予想以上に小さい私にびっくりして、思わず後ろ足を上げたら、見事に私の体にクリーンヒット！　でもって私、ぽーん！
慌てる兄ちゃんをよそに、当時の私は、ぽーんを気に入り、何度も兄ちゃんにせがんだ覚えがある。
だって、人間だったら大怪我しちゃうけど、頑丈な竜の体なら傷一つつかないんだもん。新鮮だったんだよ。それに自力では飛べない赤ちゃん竜にとって、空高く舞い上がるのは快感で。
そしてそれは、今も続くわけだ。

ザックさんから聞いたファナさんが、驚いたように口元に手をやっている。
「まあ、そんなことが……」
「ああ、だから心配しなくても、ほら。飽きたら止めるしな」
ザックさんの言うとおり、私と兄ちゃんはもうぽーんを止めて、普通にじゃれていた。
『兄ちゃーん、抱っこー』
「ああ、だいぶ重くなったな。成長の証だ。嬉しく思う」
兄ちゃんに誉められ、私はほっこりした。兄ちゃんは騎竜として忙しくしているから、なかなか会えない。
貴重な今を逃して、いつ甘えるというのだ！
全力で甘えてやるのである！
「……なあ」
「きゅう?」
兄ちゃんが話しかけてきたので、私は答える。なにー?
「お前は、何か夢を見ることはないか?」
「きゅー」
突然の質問だったけれど、兄ちゃんの為だ。私は真剣に考える。
そして、あることに思い当たった。
「きゅ！」

「……あるのか？」
兄ちゃんは、真剣に問い返してきた。
うむ、あるよ！　今朝、見たばっかり！
私は、兄ちゃんの腕のなかで必死で話した。
今朝の、腹立たしい夢を。
まず、赤いのが、ひとり立ちをするのだ。熱い海が自分を呼んでるぜと言い出して。
止める私を振り切り、大海原（おおうなばら）へと漕ぎ出す赤いの。一度も振り返らなかった！　ムッカー！
そうしたら今度は白いのが、世界に自分の救いを待つ者が居るとか言い出して、こちらも旅立って。
黒いのは何も言わず姿を消し、黄色と黄緑は、お互い以外はいらないとか言って居なくなってしまった。最後に残されたのは、私と青いのだ。
私と青いのは、泣いた。悲しくて、泣きに泣いた！　涙の海ができ上がるほどに泣いた！
「ぎゅうっふ、ぎゅきゅにゅ……っ」
夢の内容を思い出したら、また泣けてきた。怒りもある。
私は兄ちゃんの胸で、泣きながら熱く語った。
兄ちゃんは、拍子抜けしたように「そうか……」と呟くと、私の背を撫でてくれる。
兄ちゃん、やっさしー！
「……子竜さま、お労（いたわ）しや」

ファナさんは共感してくれたのか、目元をそっと拭（ぬぐ）っている。
ザックさんひとりが、途方に暮れているようだ。
「いやぁ、子竜の言葉がわからんおじさんには、なんだか居づらい空気だなー」
「ザックさまは、わからないのですか？」
ファナさんの問いかけに、ザックさんが苦笑を浮かべる。
「子竜の言葉がわかるのは、同じ竜か、ファナのような白き乙女だけだな」
「まあ。存じ上げず、申し訳ありません」
「いや、気にしなくていい」
因（ちな）みに、白き乙女とは、世話役の女の子たちのことだよ。他に黒き乙女と呼ばれる人たちも居るみたいだけど、会ったことがないから詳しいことはわからない。
「まあ、ちびっ子。ミルアやるから、泣き止め。好物なんだろ？」
ミルア！　わーい、ミルアだー！
「きゅっ！」
近寄って来たザックさんからミルアを受け取った私は、兄ちゃんの腕のなかから、ファナさんの方へジャンプする。
「あらあら、子竜さまったら」
ご飯なら、ファナさんの腕のなかが一番なのである。
ファナさんにミルアを食べさせてもらうころには、私の涙は引っ込んでいた。

「……ちびっ子、うらやましいやつ」
と、ザックさんが呟いていたが、食欲の前では聞き流すのである。
「きゅっきゅー！」
「ザックさま。子竜さまが、ありがとうございます、と」
ファナさんの通訳に、ザックさんは、そりゃどうもと返す。
そして、私の頭を撫でる。
「きゅー……」
うっとりと目を細める私に、ザックさんは苦笑を漏らした。
「こんなになつっこくて大丈夫なのか？」
それは、兄ちゃんに向けての問いかけだった。
「何がだ？」
壁に背を預け、腕を組んだ兄ちゃんは聞き返す。
「いや、こんなんで、ハズレを引いたりしないかと」
「大丈夫だ」
ザックさんの言葉に、兄ちゃんは即答した。
ハズレとか、よくわからない単語が出たけど、兄ちゃんが私を信用してくれてるのはわかったので、私は満足だ。
兄ちゃんとザックさんは、しばらくして私の部屋を後にした。

今日は凄く楽しかった！
後で思ったんだけど、ザックさんは多分、私じゃなく、ファナさんに会いに来たんだろうな。
青春！
あと、ザックさん、全然おじさんじゃないのに、なんで自分のことをおじさんって言ってたのだろう。
不思議！

第二章　理想のパートナー

お勉強、お勉強。

個室に移って、一ヶ月。子竜の成長は早いのだ。

そろそろ私も、騎竜候補としての自覚を持たねば。

そう、今さらだけど、私は我が国、カサトア王国が誇る竜騎士団に所属する騎竜の、候補なのだ。

カサトア王国以外に、竜騎士団を所有する国はないという。

あっても精々、野生の竜を飼い慣らし戦いに投入するぐらいで、我が国のように人間との絆を育んだりはしない。うちの国、凄い！

なんて誉めてはみたものの、私は、我が国――竜を有する、翼と盾の国、カサトア王国の知識なんて、実のところスッカラカンだ。

前にも言ったように私の親御さまは、どうやら歴史とか、我が国のこととかに興味がなかったらしく、親竜から受け継いだ知識のなかに、国についてのものはほとんどない。

竜騎士団以外の騎士団があることすら、知らなかった。国の治安維持を主目的とする『王の盾騎士団』は、国内での人気もかなりのものだというのに。これは、ちょっとどころか、相当無知の部類に入るのではなかろうか。

これはまずいと、知識習得に目覚めた私は、ここ最近、朝から本にかかりきりとなっている。

絵本から、我が国の歴史書まで。様々なジャンルを、ふんふん頷きながら読みふける。

――カサトア王国は、良い治世の続く、実り豊かな国だという。

隣国に、魔法大国であるザッカス帝国があるけど、ここ数百年、大きな戦いはないらしい。でも、小競り合い程度の争いは続いている。それはちょっと怖い。

だからこそ、我が国において竜騎士の存在は大きいわけである。

そうそう。竜騎士はもともとは普通の人間だけど、竜騎士になった瞬間から身体能力が強化されるんだよ。竜に選ばれた特典みたいなものかな。

あ、あと。これは私の知識にもあったんだけど、この世界には大昔に魔物が居たんだ。

その魔物を倒すのは、竜と竜騎士の仕事だったんだ。凄いよね。

私はそんなすごい竜騎士団の一員となる騎竜の候補なのだから、気を引き締めねば！

パートナー探しとか……

はっ、そうだよ、パートナーだよ！　騎竜のパートナー、すなわち竜騎士！

騎竜候補は、唯一の存在となる相手を自ら選ぶ。その相手――パートナーの決め方は、まあ何となくわかる。必要な手順と文句も。

だけどどんなパートナーが良いのかといった具体的なことを、私は全然考えていなかった。

これは、いかん。

私は、読んでいた本を本棚に戻すと、キリッと表情を引き締める。

『ファナさーん！』
ファナさんは、私が本を読んでいる間、鉄格子の外で編み物をしていた。
しかし、返事がない。
ファナさんは椅子に座り、編み道具を持って、そして、ぼうっと空を見つめていた。その姿は、私が本を読み始める前と同じ状態だ。
様子がおかしい。
「きゅっきゅーー！」
とりあえず、大きな鳴き声を出して、注意を引いてみる。
「あ……っ、はい！」
上手くいったようで、ファナさんは私に視線を向ける。
「ど、どうか、しましたか。子竜さま」
『なんか、悩み事でもあるの？』
「い、いいえ！　何にも、ありませんわ」
そう言う割には、ファナさんの顔色は冴えない。
本当に大丈夫なのだろうか。
「きゅー……」
不安になり、ファナさんのそばまで行くと、彼女はすぐさま鉄格子を開けて抱き上げてくれる。
そして、珍しいことに、彼女の方から頬ずりをしてくれた。

「お優しくて、可愛い子竜さま。私は、大丈夫。大丈夫、ですわ」
そう言うファナさんの声は震えていて、とても心細そうな様子だ。
だけど、私にはいつも通りに接しようとしていて、そこにきっと何か隠しておきたいつらいことがあるのだろうと思えてしまったから——私は、追及するのを止めてしまった。
ファナさんの様子は気になるものの、気持ちを切りかえて、私は隣室を訪ねることにした。個室に移って一ヶ月。ようやく外出の許可が出たのだ。外出の旨はファナさんを通して、世話役の長へと伝わっている。
私の部屋は、右から三番目なので、まずは右の二部屋から行こうと思う。
私は意気揚々と、右隣の部屋——赤いのの部屋へ向かう。
『久しぶりー！』
赤いのの世話役の女の子に扉を開けてもらい、私は堂々と入室した。
赤いのは、守護壁を展開してハッスル中だった。相変わらずの元気溌剌振りである。
『久しぶり！　元気だった！』
赤いのは、元気だった？　と私に尋ねているのではない。自分の体力と気力がともに充実しているのを、元気だったと断言してアピールしているのだ。一ヶ月振りの再会なのに、本当に変わらないな！
「きゅうっ！」

私は、まあ落ち着きなさいよと、赤いのに話を聞くように促す。
私が訪ねたのは、聞きたいことがあったからなのだ。
「きゅうきゅー？」
首を傾げた赤いのが、なぁにと聞き返す。
赤いのは、どんなパートナーが良いのか、もう決まっているのかと、私は尋ねた。
答えは、簡潔だった。
『強いやつ！』
赤いのは、まあ、あれだ。
私の理想とするところとは、違うところを目指してるのだ。
部屋を後にした私は、そっとため息をつき、次へ向かうことにする。
赤いのの右隣は、白いのだ。
白いのならば、有意義な話を聞けることだろう。

「きゅうっ！」
白いのの歓迎振りは、凄かった。
まず、ふかふかのクッションを用意し、私を座らせる。そして、いそいそと玩具を出してきた。
どれで遊ぶ？　それとも、疲れてるかな。あ！　なら、一緒にお昼寝する？
といった具合の甲斐甲斐しさである。

白いの。
一ヶ月間、誰の世話もできなくてつらかったんだね。
私は、遠慮なく甘えることにする。
「きゅーきゅー」
白いのと積み木で遊びながら、赤いのにしたのと同じ質問をした。
「きゅにゅう」
白いのは、少し考えてから答える。
『完璧じゃなくても良いから、心根が真っ直ぐな人がいい』
それは、実に白いのらしい答えだったので、私は納得した。
白いのに名残惜しそうに見送られつつ、私はその部屋を後にした。
白いの、相変わらず優しかったなぁ。
今度この部屋に来るときは、他の子竜も誘おう。
さて、次は左側の部屋だ。
私の左隣は、黄色の部屋である。
あ！　衛兵のお兄さん、ご苦労様です！

『ようこそー！』
と言ったのは、黄色。

『いらっしゃいませー！』
と言ったのは、黄緑だ。
まあ、わかってた。
外出許可が出た昨日の時点で、わかってた。
多分、どちらかが、速攻で入り浸りに来てるだろうな、って。
だから、私は特に突っ込むことなく、久しぶりーと返した。
「きゅいきゅ」
黄色が、座るように勧めると、黄緑が玩具を出してくる。
私たち子竜はよく遊ぶ赤ちゃんだったので、玩具は必須なのだ。
皆でパズルを解きながら、私は恒例の質問をしてみる。
二匹の答えは、意外なことにわかれた。黄色と黄緑ならば同じことを言うと思っていたから、なおさら驚いてしまう。
『そのときの気分！』
と言う黄色に対し、
『お互いに選ぶ騎士は、相手が選んだ騎士と正反対な人間がいいな』
と、黄緑が返す。
答えは違っていたけれど、どちらも、二匹らしい答えだと思えた。

立ち読みサンプルはここまで

よし！　次は、黒いのだ！
黒いのは、底知れない何かがある。私も良い刺激を得られるだろう！
意気揚々と黒いのの部屋へと向かった私だったが。
『……そんなの、愚問だ』
と、たったそれだけで追い返されてしまった。
え、あれ。黒いの？
私たち、一緒に育った仲だよね？　なんか、冷たいよ。
と、思ったら。この時間は、黒いのにとって神聖なるお昼寝の時間だった。
間が悪かったのか……
私はしょぼしょぼと、黒いのの部屋を後にした。

最後は青いのの部屋だ。
この一ヶ月間、青いのは大丈夫だっただろうか。
夜はちゃんと眠れているだろうか。
青いのに関しては、心配が尽きない。

途中で会った衛兵さんに扉を開けてもらい部屋に入ると、何だかしょんぼりとしている青いのが居た。